平成３０年度国立淡路青少年交流の家教育事業「**ボランティア自主企画事業**」実施報告

ボランティアのボランティアによるボランティアのためのキャンプ
～淡路からはじめる第１歩～

１　趣　旨：国立淡路青少年交流の家を新しい居場所にしてもらうとともに、今回のキャンプを通してボランティアに必要なスキルを身につけ、今後の活動につなげる。

２　日　時：平成３０年１１月１７日（土）１０：３０～１８日（日）１６：００

３　場　所：国立淡路青少年交流の家

４　対　象：子どもと関わるボランティアに興味のある
高校生以上の学生　２０名

５　参加者：１８名（申込者　２０名）

６　プログラムの内容：　＜進行は全て国立淡路青少年交流の家ボランティアスタッフ＞

＜１日目【１１／１７（土）】＞

１１：００～１１：２０　開会式

企画ボランティアスタッフの進行により、大本所長の挨拶から始まり、ボランティアスタッフ紹介、職員紹介を実施した。

１１：２０～１２：１０　プチレクリエーション

講堂にてプチレクリエーションとして、以下を実施した。
買い物拍手／４つの窓／キャッチ／記憶力ゲーム／チーム名決め

和気あいあいとした雰囲気のなか、自然と会話も生まれ、グループの仲を深める機会となるとともに、これからの活動への弾みになった。

１４：３０～１９：００　野外炊飯～今夜のメニューは君次第～

会場を野外炊飯場に移し、野外炊飯を実施した。
各班に分かれ、決められた時間・食材・お題のもと、活動に取り組んだ。メニューが決まっていない状況で、班員で食材を見極め、メニューを考えながら作業を進めることで絆を深めることができた。各班３品目程度調理し、調理後はバイキング形式でそれぞれが好きな物を食べた。
完成したメニューは以下の通り。

わかめごはん／ネギとお肉の焼き鳥風串焼き／オムライス／えのきの肉巻き
麻婆豆腐／ミルフィーユ鍋／あんかけハンバーグ

２０：１５～２２：００　やきいも座談会

夜は吹上浜にて、やきいも座談会を実施した。
お話じゃんけんやワールドカフェでは、「自分に影響を与えた人や事柄は？」・「最近の悩みは？」・「やってみたいボランティアは？」などについて参加者同志が語り合った。
簡単なゲームや深い会話を楽しみながら、施設の人気スポットでもある吹上浜の波音や星空など、淡路交流の家の魅力を感じる機会となった。

＜２日目【１１／１８（日）】＞

９：３０～１１：３０　やってみよう！レクリエーション企画①

２日目は、前日に体験したこと、感じたことをもとにレクリエーション企画を実施した。「アイスブレイクに使えるレクリエーション作り」をテーマに、班ごとにひとつのレクリエーションを企画した。
まずは、ボランティアスタッフからレクリエーション作りの簡単なレクチャーを行った。続いて班に分かれて、レクリエーション作りに挑戦した。初めてレクリエーションを経験する参加者も多く、戸惑いつつもそれぞれが知恵を出し合いながら、試行錯誤する姿が見られた。

１２：２０～１４：００　やってみよう！レクリエーション企画②

午後は、午前中に各班が考えたレクリエーションを実際に全員で挑戦してみた。実施後は、他班から挙がったよかった点や改善点をもとに各班にフィードバックした。各班が考えたレクリエーションは以下の通り。

フレデリック（二人で手以外の体を使いフラフープをはさみゴールを目指す）／リアルマチガイサガシ（人間が２パターンのポーズをとり、それぞれのポーズの違いを発見する）／ネバネバリバー（与えられた道具の上に班員全員が乗り、地面に落ちることなく障害物を越えゴールを目指す）／一致団結走（決められたルールに従い、班で団結して、ゴールを目指す）／ピッタリ何グラムでSHOW（提示された物の重さとピッタリになる身近な物をさがす）

１４：００～１５：３０　次につなげる第１歩

二日間の活動をふりかえり、それぞれが感じたことをスケッチブックに書き出し、班内外の人と共有した。その後に、全員で一つの円を作りこれから挑戦したいことや心がけたいことを述べた。自分以外の価値観に触れることで、自らの幅を広げるきっかけづくりにつなげていった。ボランティア活動に対する熱い気持ちを持った参加者も多く、互いによい刺激を受けていた様子であった。

１５：３０～ 閉会式

今回の企画に携わったボランティアスタッフ及び職員からあいさつを行った。

7　参加者の声

○　普段とは違った人と活動することができました。
○　ボランティアの学生が考えた身近なキャンプに参加できて良い経験になりました。
○　新しいことばかりでどれも学ぶことがありました。
○　「話す・聴く」ことが多いプログラムだったので、人との密接な関わり合いができました。

8　所感

○　プログラムに対する満足度の高さとともに、企画メンバーとなったボランティアスタッフに対する評価も高く、これからボランティアを始めたいという学生たちの良いモデルとなった。
○　当事業参加者から、淡路交流の家のボランティアや事業に興味があるので、今後情報配信をして欲しいという参加者が出てきた。（3名）
○　参加者の中に、他施設の法人ボランティアがいた。他施設の法人ボランティアが参加者の中にいることは、企画ボランティアにも刺激があったようで互いに高め合う機会になったと感じた。これを機に、施設間を超えたボランティア活動につなげていきたい。
○　企画立案、広報、準備、当日運営、ふりかえりの全てをボランティアスタッフが行った。ボランティアスタッフの中には、昨年度の当事業に関わっている者もいたため、ある程度の流れやポイントは掴んでいるようだった。
○　ふりかえりに対する重要度は理解されているが、それを充分に行う時間が確保されていない。今回はボランティアスタッフにふりかえりレポートを提出してもらうという形を採ったが、今後どういった形でふりかえりをするのか検討しなければならない。